
♪どれみふぁそったくん♪

～子どものためのアウトリーチ～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称・目的と方法

・名称「♪どれみふぁそったくん♪～子どものためのアウトリーチ～」

・目的

地方の小学校、及び医療施設、学童保育の子どもなど、普段、生の演奏を聞く機会の少ないと思われる子ども達に向けて出張で演奏会を行い、音楽の楽しさ、おもしろさを感じ、感動体験となる機会を提供する。

実施内容は、鑑賞会にとどまらず楽器のしくみ、音楽の歴史について楽しみながら知る学習の面も持ったものとし、同時に、それぞれのニーズにどう応じられるか、企画者側の意向をどこまで実施できるかを報告する。

・方法

- ①実施先とアポイントメントをとり、現場のニーズの聞き取りを行う。
- ②現場のニーズに応じた内容の演奏会の企画案を作成し、実施に向けた準備をする。
- ③実施内容の映像記録、実施先および児童からのアンケートを回収し、ニーズにできているか、学習の面はあったか、参加型であったか、という3つの視点から分析を行う。

2. 代表者および構成員

・代表者

響尾真希 音楽教育専修1回生
田又さやか 音楽教育専修1回生
清水久莉子 音楽領域専攻 卒業生

・構成員

絹田真悠 音楽領域専攻4回生
染川朱里 音楽領域専攻4回生

木村友大 理科領域専攻4回生
平塚涼太 音楽領域専攻3回生
松本ちなみ 音楽領域専攻3回生
山口美裕 音楽領域専攻3回生
森下悠児 音楽領域専攻2回生
青木輝 音楽領域専攻2回生
大森祐奈 音楽領域専攻2回生
岩本悠香 音楽領域専攻2回生
葛籠朱音 音楽領域専攻2回生
谷佳名子 音楽領域専攻2回生
市原愛咲美 音楽領域専攻2回生
伊藤史織 音楽領域専攻2回生
肥後温子 音楽教育専攻1回生
高嶋紗貴 音楽領域専攻1回生
向朱理 音楽教育専修2回生
柴田一人 連合教職実践研究科2回生
大畑一樹 音楽教育専修 卒業生
川口紗梨 音楽領域専攻 卒業生

3. 助言教員

田邊織恵先生（音楽科）

4. アウトリーチについて

・アウトリーチとは

Out（外へ）reach（手を差し出す）という意味の英語である。元々社会福祉の分野で行われる地域社会への奉仕活動、教育普及活動などの意味で用いられていた。現在では、現場へ出向いて活動する「訪問○○」「出前○○」といった受け手のニーズに合わせた取り組みも指す。⁽¹⁾

・音楽分野におけるアウトリーチ

音楽分野でのアウトリーチ活動とは、音楽家や音楽団体などが音楽に普段触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することであり、さらに提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむという双方向的なスタンスが特徴である。⁽²⁾

第2章 内容や実施経過など

今年度は京都市の小学校に限定し、実施することにした。実施するにあたり、本学の教育支援センターの西井薫教授に学校を6校、紹介して頂いた。

(5月)

- ・研究目的・企画案 検討

(6月)

- ・演奏者となる構成員への参加依頼

(8月)

- ・各学校への挨拶、訪問日の相談

(9月)

- ・第四錦林小学校、小栗栖宮山小学校、太秦小学校、
附属桃山小学校訪問、嵯峨野小学校訪問

(10月)

- ・山ノ内小学校、北白川小学校訪問
- ・第四錦林小学校 授業実施

(11月)

- ・第四錦林小学校授業実施アンケート回収

(1月)

- ・山ノ内小学校 授業実施
- ・附属桃山小学校 授業実施
- ・「e-Project」研究発表会

※以下、予定

(2月)

- ・北白川小学校 事前授業参観
- ・嵯峨野小学校 授業実施
- ・北白川小学校 授業実施
- ・太秦小学校 授業実施
- ・第四錦林小学校 授業実施
- ・山ノ内小学校 授業実施

(3月)

- ・小栗栖宮山小学校 授業実施

第3章 結果や成果など

1. 京都市立第四錦林小学校

(1) 実施までの流れ

京都市立第四錦林小学校との打ち合わせの際、「5年生の授業において、10月中旬に歌唱の授業をすることになっているため、重唱、斉唱、合唱の違いを目で見て、耳で聴いて知れるような授業ができれば、子どもにとって学びが深まるのではないか。」との意見を頂いた。前時で日本の作曲家である山田耕筰の《待ちぼうけ》の学習をするのであったことから、これらを踏まえ、次のような実施内容を構成した。また、授業者については、学校と相談した結果、担

任の先生に進行をお願いした。

(2) 実施内容

①日時 平成27年10月29日(木)

2・3時間目

②対象 5年1組、2組

③ねらい

「日本の歌曲の詩や旋律の美しさを感じ取り、声の種類や演奏形態の違いが生み出す演奏のよさを味わって聴く」

④演奏曲目

《待ちぼうけ》北原白秋作詞／山田耕筰作曲

《赤とんぼ》三木露風作詞／山田耕筰作曲

《あわて床屋》北原白秋作詞／山田耕筰作曲

オペラ「魔笛」より《パパパの二重唱》モーツァルト作曲

⑤演奏者

谷(ソプラノ)、肥後(ソプラノ)、大森(アルト)、高嶋(アルト)、大畑(テノール)、木村(バス)、山口(ピアノ伴奏)

⑥展開

- 1 男声(テノール)の《待ちぼうけ》を聴かせ、前時の学習を思い出させる。
- 2 女声(ソプラノ)の《待ちぼうけ》を聴かせ、男声との違いやそれぞれのよさについて話し合わせる。
- 3 《赤とんぼ》の1～4番のそれぞれ演奏形態を変えながら続けて聴かせ、演奏形態の違いに気付かせる。
- 4 演奏形態の種類を知らせる。
- 5 演奏形態による響きの違いや表現の工夫について話し合わせる。
- 6 《あわて床屋》を聴かせ、曲の感じやよさについて話し合わせる。
- 7 自分が他の人にオススメしたい一曲と歌い方を選ばせ、紹介カードを書かせる。
- 8 男声と女声の二重唱を紹介するため、《パパパの二重唱》を聴かせる。

(3) 分析と考察

- ・視点① 現場のニーズに込れているか

今回の学校側の要望としては「重唱・斉唱・合唱の違いを目で見て、耳で聴いて知る」ことであった

ため、ソプラノ2人、アルト2人で《赤とんぼ》を1番から4番を重唱、斉唱、合唱とそれぞれ演奏形態を変えながら演奏する場面を設けた。この案は、学校側との打ち合わせを進めていく中で出てきたものである。

・視点② 学習の場面はあったか

《赤とんぼ》を最初に鑑賞させる際、児童には、奏者の人数や演奏形態について何も伝えず、後ろを向くよう指示し、演奏者が見えない状態で鑑賞させた。その後、「気づいたことはありませんか。」という担任の発問に対し、「2、3人で歌っていた気がした。」「声が重なっていたところがあった。」など、音の重なりに気づいている様子であった。

次に、斉唱、重唱、合唱について知らせ、正面を向き演奏者が見える状態で、鑑賞をさせることで、演奏形態による声の重なり方の違いについて、ただ教科書で学ぶのではなく、目と耳で確かめながら学習をすることができたのではないかと感じた。



後ろ向いて演奏を聴く児童



正面を向き、演奏者を見ながら鑑賞する場面

・視点③ 参加型であったか

今回の授業では、「演奏形態による声の重なり方の

違い」を学習することの他に、「男声と女声の声質の違い」や「男声と女声の声の重なり」を学習する場面があり、1時間の授業のなかで学びのポイントが多く、児童は考える活動のみとなった。なかには、「歌いたかった」という意見をもった児童もおり、児童と一緒に歌う場面を設定すればよかったという反省もあがった。

演奏する曲数は減ってしまうが、学びのポイントを絞り、そのポイントに合った曲を選曲していく必要があると感じた。

2. 京都市立山ノ内小学校

(1) 実施までの流れ

京都市立山ノ内小学校との打ち合わせの際、「4年生の鑑賞の授業で、《ノルウェー舞曲》*を扱うので、それより前にオーボエという楽器について学習したい。特に、オーボエの音色に注目させることで、次の授業の学習が深まるのではないかと」という意見を頂いた。また、《ノルウェー舞曲》がオーケストラで演奏されるため、オーケストラについても触れておきたいとのことだった。これらを踏まえ、次のような実施内容を構成した。また、授業の進行については、学校と相談した結果、担任の先生と演奏者で進めていくことになった。

*グリーグ作曲《ノルウェー舞曲》第2番

A-B-Aの三部形式の楽曲で、冒頭にオーボエによって主題が演奏される。

(2) 実施内容

①日時 平成28年1月18日(月)

2・3校時

②対象 4年1組、2組

③ねらい

「オーボエの演奏を聴き、楽器の音色の特徴を感じ取る。」

④演奏曲目

モーツァルト作曲《オーボエ協奏曲》第1楽章

葉加瀬太郎作曲《ひまわり》

⑤演奏者

絹田(オーボエ)、染川(ピアノ伴奏)、田又(ピアノ伴奏)

⑥展開

- ①オーボエの音色を聴かせ、感想を聞く。
- ②モーツァルト作曲《オーボエ協奏曲》第1楽章を聴かせ、音色について感じたことや気づいたことを発表させる。
- ③絹田がオーボエという楽器について説明する。特に、リードのことについて取り上げる。
- ④児童にストロー製のリードを配布し、2枚リードを吹く体験をさせる。
- ⑤次回の授業につながるよう、オーケストラの説明をする。
- ⑥おすすめの曲として葉加瀬太郎作曲《ひまわり》を聴かせる。
- ⑦オーボエの音色や楽器などについて、家族に伝えるための紹介文を書かせる。

(3) 分析と考察

・視点① 現場のニーズに込えているか

今回の学校側の要望としては、「第一にオーボエの音色を聴かせ、その良さを味わわせる」ことであったため、授業ではオーボエの音色がよくわかる曲を選曲し演奏した。生の演奏により、教室全体に音が響き渡り、児童たちはより音色に集中して鑑賞している様子が見られた。

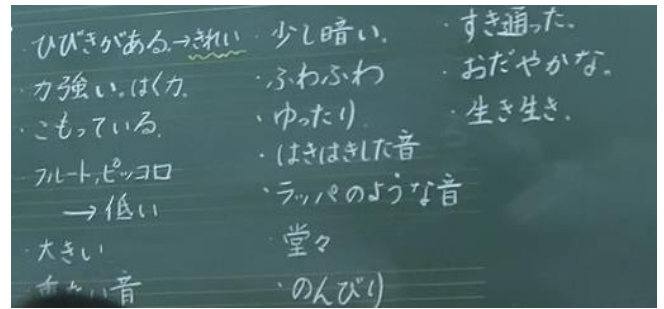


オーボエを演奏する絹田とその演奏を聴く児童

・視点② 学習の面はあったか

今回の授業では、オーボエの音色について知覚・感受を行う場面を取り入れた。生の演奏を行うことで、オーボエの音色を肌で体感することができ、さらに、感じたことを言葉で表現することによって、より学習が深まったと考えられる。

また、実際にオーボエという楽器を見ることによって、児童にとって違いのわかりにくいクラリネットとの見分けもつくようになったのではないかと考える。



音色について、児童から出た意見

・視点③ 参加型であったか

オーボエのリードに似せて作ったストロー製のリードを使い、ダブルリードを吹く体験を取り入れた。また、2校時と3校時の間の休み時間には、児童らが奏者に近づいて行き、オーボエを間近で見せてもらっている場面もあった。ただ演奏を聴くだけでなく、このように奏者と児童の交流が見られたことは、アウトリーチを行ううえで、意義のあることだと感じた。



ストローのリードを吹く児童



児童らが奏者にオーボエを間近で見せてもらっている場面

3. 京都教育大学附属桃山小学校

(1) 実施までの流れ

附属桃山小学校と打ち合わせをした際、「学校にある教育用楽器を用いて演奏者と一緒に演奏できれば、子どもたちの音楽観が広がるのではないか」という意見を頂いた。そこで、今回は、教育用木琴とカホン（附属桃山小学校ではカホンを椅子として使っている）を用いた演奏会を行うことにした。また、実施内容は、授業の形式ではなく、演奏会の形式で検討し、そのなかで参加型の場面を設けた。進行や演奏会内容は主に学生が担当することにした。

（2）実施内容

①日時 平成28年1月20日（水）

5・6校時

②対象 6年1組、2組

③ねらい

「学校にある楽器で、一緒に演奏しよう。」

④演奏曲目

パヘルベル作曲《カノン》

カバレフスキー作曲「道化師」より《ギャロップ》

→Pia-no-jaC← 作曲《うさぎ DASH》

シュトラウス作曲 →Pia-no-jaC← 編曲《美しく青きドナウ》

⑤演奏者

響尾（マリンバ）、平塚（カホン）、山口（ピアノ伴奏）

⑥展開

1 マリンバという楽器を紹介する。

2 マリンバで《パッヘルベルのカノン》を聴かせ、音色に注目させる。

3 マレットによる音色の違いについて学習させる。

4 教育用木琴で《ギャロップ》を演奏し、学校にある楽器も立派な1つの楽器であるということを学習させる。

5 カホン演奏者が笛を吹きながら急に登場することで場の空気を変え、カホン《うさぎ DASH》を演奏する。

6 児童の座っているカホンを使って、3つのリズムパターンを覚えさせる。

7 叩く場所などを工夫しながら、リズムパターンに合った音色を考えさせる。

8 音楽に合わせて、それぞれが考えた音色で演奏者と一緒に演奏する。

（3）分析と考察

視点① 現場のニーズに応えているか

今回の学校側の要望としては、「学校にある楽器を使って一緒に演奏すること」であった。それに則った演奏会構成として、カホンによる参加型の活動を取り入れた。演奏後、児童に感想を聞くと「カホンで、こんなふうに演奏できると思わなかった。」という発言があり、今回のアウトリーチによって児童の音楽観を広げることが出来たのではないかと考える。

視点② 学習の面はあったか

今回の演奏会では、生の大きなマリンバの演奏を聴く場面を取り入れた。子どもたちにとって木琴というと、学校にある「教育用木琴」である。実際にはさまざまな大きさや種類の木琴があり、その中でもマリンバの豊かな音色を聴くことができた。児童らの感想として、マリンバの低音の響きに関する意見が出ており、音色の違いを知覚・感受することができたと考える。

今回の演奏会はマリンバとカホンで構成し、マリンバによる音色とカホンのリズムの学習の視点を2つもったため、双方のつながりがなく、1時間の演奏会に統一感が見られなかったという反省点も挙げた。この反省を受け、今後は、学習視点を1つに絞ることも考えていきたい。

視点③ 参加型であったか

今回は児童が座っているカホンを用いて、一緒に演奏する活動を取り入れた。子どもたちにとってカホンは身近な楽器であり、それを使って一緒に演奏できたのは、演奏者と児童どちらにとっても貴重な機会であったと感じた。



カホンに座って演奏者の話しを聞く児童の様子

第4章 まとめと反省、今後の展望など

アウトリーチの実施にあたり、実施内容に関する打ち合わせを行った時期が9月以降であったため、芸術鑑賞会のような行事として演奏会形式で実施することは難しいという意見があった。しかし、音楽科の授業内において、鑑賞教材として生の演奏を用いることで、子どもにとって学びが深まり、更に感動体験になるのではないか、という意見もあった。

また、実際に学校と実施内容を検討していく際、学校現場では、私たちが意図していた演奏会の形式ではなく、音楽科の授業内で、ゲストティーチャーとして演奏をして欲しいと希望する学校が多かった。

学習の面をもち、学校現場のニーズに応え、且つ企画者側の意向を実施するには、授業内で生の演奏をする形式の実施内容がふさわしいのではないかと、という結果も見えてきた。

今後は、2月以降に行う予定になっているアウトリーチもあるため、既に実施した3校での反省を活かし、児童にとってより感動できる体験となるような実施内容を検討していきたい。

<参考・引用文献>

- (1) 松本 菜摘,河添 達也 (2015)「小学校音楽科における「教育プロジェクト型アウトリーチ」の授業開発研究」『島根大学教育臨床総合研究』島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センターpp.181-190
- (2) 林睦(2009)「音楽のアウトリーチ活動に関する一考察—日本における導入 10 年と今後の課題」『音楽教育学の未来』音楽之友社, pp.280-290.